

幻の民五郎

野村胡堂

—

「親分、梅はお嫌いかな」

「へえ？」

錢形平次も驚きました。相手は町内でも人に立てられる三好屋の隠居、十徳とくまがいの被布ひふかなんか着て、雑俳ざっばいに凝こっていていようと、いう仁体じんていですが、話が不意だったもので、平次はツイ梅干れんそうを連想せずにはいらなかったのです。

「梅の花じゃよ、——すがも巢鴨のさる御屋敷の庭に、大層見事な梅の古木がある。この二三日は丁度盛りで、時にはうぐいす鶯も来るそうじゃ。場所が場所だから、俗もぞく風雅もふうが一向寄り付かない。御屋敷の新造が解った方で、——三好屋の知合いで、風流気のある方があつたら、是非御一緒に——とこういうのじゃ、どうだな、八五郎あにい兄哥」

三好屋の隠居は、相変らず日向に寝そべって、自分の身体一つを持って余しているガラツ八の八五郎に声を掛けました。

「梅の花というと、花合せの赤丹をあかたん思い出すような人間に、風流気なんかあるわけはありません。御隠居さん、無駄ですよ」

平次は苦笑いをしております。

「お言葉だがネ親分、梅の花なんざ、小汚こぎたねえばかりで面白くも何ともねえが、御馳走と新造付なら考えるぜ」

「馬鹿野郎、何て口の利きようだ」

「いいやね、親分、八兄哥は正直だ、——それに向うじゃ、平次親分を伴れて来て下されば、恩に着ますつて言う位だから、御馳走の方は俺が引受けますよ」

三好屋の隠居は、何心なく筋書の底を割ってしまいました。

「へッ、御名指おなぎしと来やがる、お安くねえぜ、親分」

とガラツ八。

「そんな事だろうと思いましたがよ、御隠居さん、話が筋になりそ

うだ、御供しましよ」

「行って下さるか、親分」

三好屋の隠居は有頂天でした。何か余程甘い話がありそうです。すぐ支度に取り掛って、三人連れの無駄話に興じながら、巢鴨の屋敷に着いたのは、彼れこれ未刻やつはん半刻。

藁葺わらぶきの洒落しやれれた門を入れて、右左に咲き過ぎた古木の梅を眺めながら、風雅な入口の槃はんを叩くと、

「――」

美しい女中が現われて、行儀正しく式台に三つ指を突きます。

何だか、昼狐ひるぎつねにつままれたような心持、平次はもとより、お喋舌しやべり

のガラツ八も、毒氣を抜かれて黙り込んでしまいました。

「神田の三好屋が、平次親分を連れて参りました。御新造様に御取次を願います」

三好屋の隠居は茶人帽ちやじんぼうを脱いで、よく禿げた前額をツルリと撫で上げました。襟へ落ちる柔かい春の陽、梅の匂いに薰くんじょう醸された和なごやかな風、すべてが静かに、平和に、そして一脈の寂さびをさえ持った情景でした。

「暫らく御待ち下さいまし」

芝居の御腰元の外には見たこともないような、淑しとやかな女中が姿を隠すと、

「へッ、三ツ指で、——御待ち下さいまし——と来やがった、親分、悪い心地はしないネ」

「馬鹿」

平次は睨む真似をして見せます。

道々、三好屋の隠居が話してくれましたが、この梅屋敷というのは、三千五百石取の大旗本、本郷丸山の荻野左仲おぎのさちゆうの別荘で、住んでいるのは、愛妾あいしやうお紋の方。左仲との中に、男の子を一人生みましたが、仔細あつて左仲に疎うとまれ、巢鴨の梅屋敷に遠ざけられて、女中を相手に豪勢な暮しをしているのでした。

「まア三好屋さん、御骨折でしたねえ、平次親分、よくいらつしやいました」

お紋は下へも置かぬ待遇あしらいでした。年の頃二十七八、脂あぶらの乗り切った美しさで、被布ひふも着ず、裾も引かず、縞物しまものを町家風に着た無造作な身扮みなりのうちに、愛嬌と魅力がこぼれて、誰にでも好感を持たせずにはおかない年増振りです。

「初めて御目にかかります。あつしは神田の平次で、お言葉に甘えて、飛んだお邪魔をいたします」

「まあ、そんな改まった事を仰しやらずに、遠縁の姪めいの家へでも来たつもりで、ゆっくりくつろいで下さい。八五郎さんもまあ、真四角に坐ったりして、ホ、ホ、ホ、ホ」

「へエ——」

気が付いて見ると、ガラツ八の狭い袷あわせから、膝つ小僧が喰み出しているのです。

「今自慢の料理をお目にかけます。ちよつと、御待ち下さいまし」
身を翻かえすとお紋は、大きい揚羽あげはの蝶ちょうのように、ヒラリと襖の蔭へ隠れました。多分お勝手の指図でしょう。



「ね、万事あの通りさ、恐れ入ったろう、親分」

三好屋の隠居は、人の好きそうな眼をしばたいて見せました。

「御新造の元の身分は？」

平次はそつと囁きました。

「何でも、町芸妓だったということだが、詳しいことは誰も知り

ませんよ。荻野左仲様が見染めて三千五百石のお部屋様に直して

「シッ」

話の最中に、

「まア、内証話？」

私のたなおろ棚卸しなんか嫌ですよ」

朗らかさと、美しさを撒き散らして、お紋は入って来ました。
それから酒――。

お紋は元が元だけに、すっかり三人を潰してしまいました。灯が入った時は、もう玉山崩れて、足の踏み場もないほどの有様です。

何時もの平次なら、こんなになる前に帰ってしまったでしょうが、お紋の取なしの底に、何か重大な意味がありそうで、ツイ立ちそびれて暗くなってしまったのでした。

ガラッ八と三好屋の隠居が、すっかり潰れて正体も無いのを尻目に、平次はそつと庭へおり立ちました。

あつら

誂えたような銀鼠色の朧月夜、春の霽もやに蒸された梅が匂つて、

飲み過ぎた頭の芯しんが痛むような中を、なんの心もなくそぞろ歩いていると、道は不意に尽きて、目の前にかなり大きな離屋はなれが建つております。

「どうぞこちらへ——」

どこから現われたか、小腰かがを屈めたのは冷たい美しい女中、雪洞ほんぼりを左手に移して、離屋しおりどの柴折戸しおりどをそつと開けました。

黙つて入ると、中には籠行燈かごあんどんが点ついて、座蒲団が二つ、平次が来るのを待っていたような心憎い用意です。もつとも、夜風に吹かれて庭を歩いたのは出来心ですから、そんな都合にならなければ

ば、そつと座を外さして、ここへ案内するつもりだったのでしよう。

「親分、こんな折を御待ちしておりました」

「あ、御新造」

女中に呼ばれて駆け付けたらしいお紋は、少し息をはずませて、お品の悪くない程度に、斜ななめに坐るのでした。灯を背にして、ほの白い顔、岩佐又兵衛の絵から抜け出したような、妖艶な姿態ポーズが、相手を苛立たせずには措きません。

三千五百石取の旗本の妾——地じの町芸妓が匂うにしても、何となく不思議な魅力みりよくを持った女です。

「御新造、ざつくばらんに申しますが、あつしをここへ呼んで下さった御用というのは何です」

平次はたいして酔っていませんでした。打ち寛いだうちに何となく事務的に、ビジネスライクこう片腕を膝に突きます。

「聞いて下さい、親分、——私は世にも恐ろしい者につけ廻されております」

「——と仰しやると？」

「あの姿のない大泥棒、近頃御府内を騒がせている幻の民五郎にまほろし

「えッ」

「親分、私を助けて下さい。私ばかりじゃありません、丸山の御

屋敷に残して来た、若様の御身の上もどうなるかわかりません」

「詳しく承くわりましたよ、一体どうしたと言うのです」

平次は事の重大さに膝を乗り出しました。

幻の民五郎というのは、一年ほど前から江戸中を荒し廻る不思議な怪盗で、銭形の平次も、こればかりは手を焼いていた相手だったのです。

幻の民五郎の正体は、誰も確かに見たと言う者はありませんが、大家や大町人を手当り次第に襲い、現金だけを盗んで歩く怪盗で、うっかりそれを妨さまたげたり、追掛けたりしようものなら、虫のように刺殺されることを覚悟しなければならなかったのです。

姿を見た者をきつと殺す——それが幻の民五郎の流儀だったのです。

幻の民五郎は、唐紙や屏風びょうぶの絵の中へも溶け込み、衣桁えこうや衣紋竹の着物の中へも消えて無くなると言われました。兎に角、不思議な術を心得た怪盗で、一年越し、江戸中を人もなげに荒し廻りながら、南北の与力よりき五十騎、同心二百四十人、その配下の岡っ引は何百人とも知れませんが、誰にも指も差させなかったのです。銭形の平次ほどの者も、幻の民五郎には二目も三目も置かされませんでした。今までも随分手を尽して追ひ廻しましたが、足跡一つ、髪の毛一本捜し出すことが出来なかつたのです。

「――」

平次はもう一度強くうなずきました。

江戸中の御用聞の中から、選りに選って、幻の民五郎の挑戦ちようせんを受けたような気がしたのです。

それは実に、一刻一瞬の油断もならぬ、命がけの挑戦でもあったのです。

三

「親分、聞いて下さい。私は丸山の屋敷から放ほうり出された上、何

にも知らない若様——私の腹を痛めた勇太郎様まで——命を狙わ
れています」

お紋の話はまことに混み入ったものでした。——町芸妓をして
いたお紋は、受出されて丸山の荻野家おぎのに入り、本妻亡き後は、奥
方同様の待遇たいぐうを受け、二年前に跡取の勇太郎まで生みましたが、
亡くなった本妻の弟で、変人扱いにされている高木銀次郎が、用
人の大沢幸吉と腹を合せて、事毎にお紋母子を陥れおとしようとしたと
いうのです。

高木銀次郎は兵法忍術に凝って三十過ぎまで荻野家の世話に
なっているような人間ですが、義兄荻野左仲の眼を盗んで、お紋

を執念^{しつこ}く追い廻し、手厳しく恥かしめられたのを根に持って、悪事の仲間を語らつて、お紋の素姓をあばき立て、到頭荻野家にもいられないような事にしてしまったのでした。

お紋の素姓——と言うのは、さすがに本人は言い渋^{しぶ}りましたが、訊き上手の平次が、いろいろ鎌をかけて引き出したところでは、將軍秀忠の命を狙ったという疑いで、宇都宮十五万石を召上げられ、先年出羽の配所で死んだ本多上野介正純^{こうずけのすけまさずみ}——その謀士で、釣^{つり}天井^{てんじょう}の仕掛を拵^{てんじょう}えたと思われている、河村鞠負^{ゆきえ}こそは、お紋の本当の父親だったのです。

謀叛^{むほん}人の娘として、お紋は艱難辛苦を嘗めました。浅草の乳母

に引き取られて育った上、その乳母にも死別れ、町芸妓になったところを、荻野左仲の目に留って、暫らく湯島に囲われ、本妻が死んでから丸山の屋敷に入って、跡取の勇太郎を生んだ——と言
うのです。

お紋の異常な美しさも、その魅力の底に潜む品位も、河村鞆負の娘と聞けば、成程うなずけないことはありません。

「私は幸い父親の遺した物や、荻野家の御手当で何不自由なく暮しております。このまま朽ち果てても怨みとは思いませんが、謀叛人の娘の腹を藉りた子に、三千五百石の由緒ある旗本の家は継がせられないと言って、高木銀次郎、大沢幸吉の一味が、私の手

から父河村鞆負ゆきえの形見——短刀と系図けいずを奪い取つて、それを証拠に勇太郎様を追い出そうとしているのは我慢がなりません」

「——」

「親分、そんな理不尽なことがあるでしょう。親は謀叛人でも、その娘の私になんの科とががありました。まして勇太郎様はまだほんの三つ、あんまりお可哀想じゃありませんか」

お紋はそつと涙を拭きました。居崩れた膝を直して、下から平次を仰ぐ顔は、どう見ても三十近い大年増ではありません。

母屋おもやの方からはガラッ八と三好屋の隠居の歌うダミ声。

「ところで御新造、幻の民五郎の話が出たようだが、彼奴あいつはどう

かしましたか」

平次は耐え兼ねて訊きました。

「昨夜何者とも知れず忍び込んで、手文庫の中から手紙の束を盗んで行きました」

「その父上の形見とやらを？」

「いえ、それは袋戸棚に入れてあつたので幸い助かりました。盗られたのは、高木銀次郎から私へくれた恋文が七本」

お紋もさすがに極りが悪そうでした。

俯向いてほのかに笑うと、片面が翳^{かげ}って、何とも言えない淋しさが湧きます。

「何で、そんな物を持っていなすった、焼きも捨てもせずにと平次。」

「万一、高木銀次郎が私を相手に正面から来た時は、あの汚けがらしい恋文に物を言わせるつもりでした。頼る者もない女は何かにつけて、用心深くなります」

「フム」

「父親の形見の短刀と、系図は無事でしたが。いずれ今晚あたりは又盗りに来ましよう。姿も、形も無い曲者が、嚴重な締りを開けて入って、好きな物を盗って、衣えこ桁の着物に溶け込むように隠れたのですもの、幻の民五郎とでも思わなければ、この眼がどう

かしております」

「――」

「形見の短刀と系図が向うの手に入れば、勇太郎様は虫のように押し殺されるか、野良犬のらいぬのように追い出されるに決っております。親分、お願いで御座います。私を助けるつもりで、今晚はここへ泊って下さいまし」

お紋は寄り添って、平次の裾でも、帯でも掴みたそうでしたが、さすが、年にも身分にも恥じて畳へ手を落したまま、がっくり首を垂れるのでした。

「幻の民五郎には一年越し馬鹿にされている。勝つか負けるか解

らないが、兎に角及ぶだけの事はして見ましよう、——とところで、民五郎は、どうして高木や大沢と一緒にになったか、心当りはありませんか」

「何にも、——もつとも高木銀次郎は武芸兵法に凝^こって、わけても忍術は自慢ですが」

「フム」

どうやらその辺がキナ臭いようでもあります。

四

いい加減酔っ払っているガラツ八は、追っ立てるようにして宵のうちに神田へ帰しました。

それは、お静が待っているといけなと思う、平次の心やりからでした。

三好屋の隠居は、止めるのも聞かずに、亥刻過ぎ急に思い立って帰ると言い出します。

「大丈夫、駒込へ出る前に駕籠を拾って行く、年は取ってもシャ
ンとしているぞ」

そんな事を言いながら、茶人帽を阿彌陀あみだに、足元危うく巢鴨の夜の闇へ出たのです。

平次は母屋の奥の一と間、八畳の贅ぜいを極めた部屋に、生れて初めてやすの絹夜具に包まれて寝みました。有明の絹行燈は、少し艶めかしく枕屏風の影を青畳に落して、馴れない平次には結構過ぎて寝心地が悪い位。

枕元の小机の上には、帛紗ふくさに包んで、お紋の父河村鞆負の形見と言う短刀、——主君本多上野之介が、東照権現様から頂いて、鞆負に預けたままになったと言う、三つ葉葵の紋を散らした因縁いんねん附の短刀——を置いて、何べんも寝返りを打ちながら、悩ましい眠りに落ちました。

お紋は慎み深く、それつきり姿を見せず、美しい女中達も遠く

退つて銘々の部屋へ入った様子、巢鴨の夜は、滅入るように、ただ深々と更けて行きます。

「野郎ッ」

平次はガバと起きました。

何やら魍魎あやかしが、自分の喉笛を狙っているのを、夢心地に気が付いたのです。

巨大な怪鳥のようなものが、平次の胸の上をヒラリと飛びました。

「御用ッ、神妙にせい」

平次は何やら掴んでグイと引くと、一朶だの黒いものが手に残つ

て、曲者はパッと飛びました。恐ろしい軽捷な身のこなし。けいししょう

追いつがる平次は、枕屏風にハタと躓く間に、つまず曲者の身体は、

真に一片の黒雲のように、平次の袷を掛けた衣桁へ、サツと消え込んでしまったのでした。

「己れツ」

続いて飛付きましたが、手筈もなく衣桁は倒れて、平次が抱き付いたのは、脱ぎ捨てた自分の袷だけ。

「どうなさいました」

やや暫らく経ってから、物音を聞き付けたらしい主人のお紋は、女中に手燭てしよくを灯ともさせて駆け付けました。

「あ、御新造、到頭」

「――」

「幻の民五郎は、短刀を奪って行きましたよ」

「えッ」

「面目次第もないが、少し油断しました」

銭形の平次も、すっかり恐縮して鬚節まげぶしを叩いております。

「親分、どうしましょう」

お紋は根も力も抜けてしまったように、冷たい畳の上へ、へタへたと坐り込んでしまいました。派手な長襦袢ながじゅばんの上へ、大急ぎで

羽織ったらしい小袖の紫が、冷たく美しい女中の差出す手燭の中

に、又となく艶めかしく見えるのでした。

「一度はやられたが、今度は——」

平次は急しく^{せわ}袷を引っかけると、部屋の外へ飛出しました。左手には有明の行燈を提げて、曲者の通つたらしい道を、嘗^なめるように進んで行きます。

「お、ここから入ったのか」

縁側の戸が一枚、物の見事に外されて、そこから点々たる泥足の跡が、平次の寝室まで真っ直ぐに続いているのでした。

「親分、何か見付かりましたか」

お紋と二三人の女中が、恐る恐る廊下を覗いております。

「御新造、不思議な事だらけですよ」

「――」

「この様子じゃ幻の民五郎は、思いの外甘い野郎かもわかりませ
ん」

「まア」

「すぐ捕まりましたよ、御安心なさいまし」

平次の声は妙に自信に満ちております。

「どうか、早く捕えて下さい、あの短刀はざらにある品じゃあり
ません。鞆さやは三つ葉葵の紋散らして御公儀に書上げのある品、本
多上野之介様の御品と判り切っております」

「おや、泥足の跡は、入ったのばかりで、出たのがないのはどうしたことでしょう」

「お紋は妙なことに気が付きました。」

「それにこんな大きな足の人間はあるものでしょうか」

「平次はそれには答えず、その辺中を忙しく見廻せわしております。」

「親分、まだ幻の民五郎が家の中にいたらどうしましょう、捜して見て下さいませんか」

「大丈夫ですよ、御新造、その大きな足跡は大一番の草鞋わらじを穿いて附けた跡で、帰りにはそれを脱ぎ捨ててしまいましたよ」

「まア」

「一寸待って下さい」

平次は庭下駄を突っかけて、暫らく縁の下から庭の植込みを捜しておりましたが、やがて、仁王様の草鞋のような、大きな泥草鞋を一足ブラ下げて帰って来ました。

「まア」

女達の驚きは見物みものでした。

「この足跡はひどい内輪じゃありませんか」

お紋は鋭い女でした。平次が気が付いているかいないかわかりませんが、兎に角、先を潜くぐるようになっています。

「それが面白いところですよ、御新造」

「女——まさか」

お紋はぞつとした様子で肩を萎すぼめました。

「幻の民五郎が女に化ける筈はありません。これは忍術の方の忍びの足取りです」

平次は腰を浮かして、内輪に爪立った忍び足をやって見せました。

「忍術？」

お紋はギョツとした様子です。

五

騒ぎは、これがほんの序幕じよまくでした。

翌る朝、巢鴨の往来——一寸人に気付かれない堀の蔭に、三好屋の隠居が突殺されているのが発見され、続いて、お紋の家の隣、界隈の物持ちで通っている植木屋へ、型の通りの怪盗幻の民五郎が入って、小判で二百両あまりの金を奪った上、主人惣吉の土手っ腹を刳えぐって逃げ失せたのです。

騒ぎは一刻も経たぬうちに、巢鴨中を煮えくり返らせました。

名主五人組が立会って検屍けんしを受け、土地の御用聞大塚の重三が、委細いさい呑込んで探索にかかりましたが、そこに居合せた銭形の平次の器量の悪さと言うものではありません。

三好屋の隠居を殺したのも、植惣の主人を刺したのも、同じヒ首らしく、唯一と突きで急所を誤らなかつたのは、何と云つても恐ろしい手際です。

たった一つの手掛りと言うのは、植惣の庭に落ちていた帛紗ふくさで、これはお紋の家から、短刀を包んで盗み出した品ですから、植惣の曲者は、お紋の家を襲つた曲者、すなわち幻まぼろしの民五郎に間違ひ

ありません。

平次が曲者を追掛けた時、手に残ったのは少し羊羹色ようかんいろになった羽二重の羽織で、紋は、丸に鷹たかの羽の打つ違い、さらにある紋ですが、——高木家の定紋もこれと同じもの——、とお紋はそつと平次に囁きました。

「親分、大変な事が始まったんだね」

「お、八か」

「銭形の親分が幻の民五郎に嘗なめられたって巢鴨中の評判だぜ。俺は口惜しくって、口惜しくって、先刻から、そんな事を言う野郎を、二三人殴り飛ばしてやったが——」

「何て事をするのだ」

飛んで来たガラツ八の遠慮のない声を聞くと、平次はさすがに顔を反そむけました。

「俺が頑張っていていさえすりゃア、こんな事がなかったんだ。神田へ帰ったのが一代の不覚さ」

「つまらねえ事を言うな、それより手を貸せ、刃物を捨てて行つたかもわからない」

「刃物なんざ、何だつて構やしない。幻の民五郎があいくちヒ首へ本名でも書いていりゃ占めたものだが」

「何を、くだらない」

平次は取り合いませんでした。梅屋敷から植惣の庭のあたり、藪やぶも溝みぞも、木立も、塀の下も、念入りに見て歩くと、梅屋敷の大根畑の中に、何やら新しい足跡。

「おや」

よく見ると黒い土の間に、キラリと光るものがあります。

土をかき退けるように、掘り出して見ると、見事な短力が一口、ひとふり

柄さめの鮫がすっかり血に汚れて、刃もひどい血曇りですが、どうしたことか鞘さやが見当りません。

「あれだ」

紛まぎれもない、昨夜平次が枕元から盗られた短刀。曲者はこれで

植物を害めた後、三つ葉葵を散らした鞆だけは持って帰ったのでしよう。

その間に、お紋の説明を聴いた大塚の重三は、

「よしッ、それじゃ下手人は高木銀次郎とか言う浪人に決った。旗本の食客いそうろうじゃ始末が悪いが、幻の民五郎の正体と判っちゃ放つて置けまい。若年寄方と掛合いごっこを始めちゃ鳥が飛んでしまふ、構う事はねえ、外へ出たところを縛れ」

無法な奴があつたもので、そのまま子分を伴れて、本郷丸山へ飛んで行きました。

旗本は勿論のこと、武家は町方の手で無闇に縛れなかつたので

すが、浪人となると、話が違ひます。高木銀次郎、武家には相違ありませんが。お主も係累けいるいもない。天涯孤独の浪人。近頃は義兄の荻野左仲のところにも居憎にくくなつたと見えて、食扶持くいぶちだけを貰つて、ツイ屋敷外の長屋に、鰥暮やもめぐらしの気樂さを楽しんでいるのです。

六

「相手は兵法と忍術に凝こっているんだ、油断をしちやならねえ」

「心得たよ、親分」

「腰の物を預けたら、直ぐ飛込んで、口上を言うんだよ」

「へエ」

「腰の物は番合にいる娘が持って逃げる手筈だ、ドジを踏むな」

「合点」

大塚の重三は、十五六人の子分を伴れて、もう一刻も前から、丸山湯の路地に身を潜めております。

お紋は、謀叛人むほんにんの娘と言う自分の素姓は言いませんでしたが、

高木銀次郎の怪しい事は、重三へも平次と同じように話していたのです。

「そら、来たぞ」

「シッ」

羊羹色の着流し、不精らしく懐手をして、一刀を落した浪人体の男は、大通りから入って、丸山湯の方へ差掛ったのでした。

三十二三の瘦ぎすながら見事な恰幅^{かつぶく}。少し月代^{さかやき}が伸びて、青白い顔も凄みですが、身のこなし、眼の配り、何となく尋常ではありません。

浪人者は丸山湯の暖簾^{のれん}を肩で分けて、スツと中へ入りました。

「大層空いているな」

番合^{べっ}へ一瞥。

「ハ、ハイ」

娘は一ぺんに顫え上がってしまいました。

刀を鞘さやごと抜き取って、娘に渡そうとして、ハッと気が付いた様子。

「可怪しな娘だ。逃げ腰になつて腰の物を受取る奴があるものか、——それに大層顫ふるえているではないか」

「——」

思わず、今入つて来た入口の方へ眼を移すと、暖簾のれんの間から、鉢巻たすき、襷たすきと言つた扮装いでたちの人間が、押し重なつて覗いているではありませんか。

「おや」

浪人は一度渡しかけた刀を引つたくるのように、ピタリと左腰に差しました。プツリと鯉口こいぐちを切っております。

かくと見た見た暖簾の外の一隊。

「それッ、気が付いたぞ、取逃すなッ」

「おッ」

職業意識を真っ向に振りかざして、バラバラと土足のまま飛込みました。

「御用」

「神妙にせい」

殺到する十手、捕縄、十五六の肉塊にくかい。

「人違いするな、俺は高木銀次郎、縄目を受ける覚えはないぞ」
浪人——高木銀次郎は、飛退くと積んだ小桶を楯たてに、流しの真
ん中に、身構えました。

「その高木銀次郎を召捕るのだ、神妙にせい」

「何？ 高木銀次郎と知って縛るといふのか、俺は縛られるのが
嫌いだ」

ギラリと引き抜いた一刀、陸湯おかゆにスーッと入れて、振り被りま
す。

恐ろしい落着きと、心得た態度に、十何人の捕方は、ギョツと

して立停りました。

「御用」

「神妙にせい」

「馬鹿奴ツ、何の理由わけがあつて縛る。それを聞かないうちは、不浄ふじよう役人の儘になる俺ではない、命の要らぬ奴は来い」

振り被つた一刀は、毒蛇の如くりゅうと閃めきます。

「高木銀次郎こと、幻まぼろしの民五郎とはその方に相違ない、訴人があつて確かだ、神妙にお繩を頂戴せい」

「何、幻の民五郎」

あまりの事に高木銀次郎、一步退きましたが、運悪く流しのぬ

めに足を取られて、ハツと滑るところへ、待ち構えた小桶四つ五つ、三方から狙い打ちに飛びました。

「あッ」

それを避けるはずみに、高木銀次郎の身体は、物の見事に引くり返ります。

「それッ」

畳みかけて五六人、こうなると馴れたものが勝です。兵法にも忍術にも及ばず、あッと言う間に高木銀次郎、高手小手に縛り上げられてしまいました。

「親分、高木銀次郎は白状しないって言いますぜ」

「そうだろう」

平次は近頃すっかり憂鬱ゆううつでした。お紋のところからは三日に一度位ずつ誘い出しの手紙が来ますが、あの晩の縮尻しくじり以来家に籠こもって考え事ばかりしていたのです。

親分思いのガラツ八は、すっかり心配して、お静と心を協あわせていろいろ慰めもし、励ましもしましたが、平次は頭を振るだけで、一向相手にもならなかったのです。

そのうちに、高木銀次郎の長屋の天井裏から三つ葉葵の紋を散らした短刀の鞘が現われて、徳川の禄を食む役人達の神経をすっかり尖らせてしまいました。

平次が曲者から剥いだ羽織は、紛れもなく高木銀次郎のものと解った上、家捜しをして見ると、幻の民五郎が諸方から盗んだ品——現金以外は滅多に手をかけない民五郎でしたが——財布や胴巻や金入れといったようなものや、荻野左仲の食客に似気ない大金が、床下、押入れの奥などからぞくぞく現われて来たのです。

大塚の重三はすっかり得意でしたが、肝腎の高木銀次郎は、骨が舍利しゃりになっても白状しません。

「八、もう一度運試しにやってみようと思うが、どうだろう」

「有難い、親分がその気なら、あつしは命を投げ出しますぜ」

「一か、八か、——兎に角、もう一度やってみなきゃア俺には腑ふに落ちない事ばかりだ」

「何をやらかしゃいいんで、親分」

「耳を貸せ」

何やら打合せて平次は、羽織を引っかけると、どこへ行くとも言わずにフラリと飛び出してしまいました。

最初は本郷丸山町の荻野左仲の屋敷。

丁寧な口上を取次がせて、用人大沢幸吉に逢い、一刻余りも話

し込んだ上、そこを出ると、巢鴨の荻野家の別荘——今はお紋の宿へやって来ました。

その時はもう夕景。

「あら、平次親分、随分久し振りじゃありませんか」

お紋は相変らず機嫌よく迎えてくれて、奥の一と間へいそいそと案内しました。

「御新造、すっかり御無沙汰しました。曲者は逃す、幻の民五郎は重三兄哥あにいに捕えられつかまる、いやもう平次も散々の体で、一時は十手捕縄をお上へ返上しようかと思いましたがよ」

平次は本当にしよげ悄気ている様子でした。

「そんな事はありやしません。平次親分は、曲者の羽織を掴んで、動きの取れぬ証拠を押えたり、足跡や草鞋わらじから、いろいろの事を言い当てなすったり、畠の中から短刀まで捜し出したじゃありませんか。御遠慮も場合によります、お目にかかってお礼を申し上げたいと思つて、何べんお迎えを差上げても、いらつしやらないんで、どんなにお怨み申し上げたことか——」

「——」

「幸い私も、近いうちに、丸山町に帰ることになりました。それもこれも、親分の御骨折の御蔭、今晚はどうぞ御ゆつくり召し上つて下さい」

本当に下にも置かぬ待遇もてなしでした。

平次はいつもになく落着き払って杯を挙げ、宵のうちから大分ろれつが怪しくなっております。

「御新造、高木銀次郎はここへ来たことがあるでしょうか」

「飛んでもない、あんな奴を寄せ付けることじゃありません」

「それにしちゃ、雨戸を開けて迷いもせずにあっしの泊っている部屋へ来たのは変ですね」

「え？」

「変と言えば、変なことだらけですよ、御新造」

平次はもう眼の色さえ怪あやしくなっております。

「何が変でしよう」

凝じつと平次を見詰めた女の眼、——と息ちよくに猪口をあけると、平次の手に持たせて銚子を上げます。

「足跡も変でしよう。人の家へ泥棒に入るのにわざわざ泥を付けた草鞋わらじを穿かなくなつていいわけだ。あの晩は雨なんか降つちやいなかったでしよう」

「——」

「草鞋を植込に捨てたのに、庭に足跡がないのはおかしいと思いませんか。曲者は縁側から草鞋を植込へ抛り込んで、そつと元の廊下を引返し、裏から植惣うえそうへ行つて植惣の主人を殺し、又引返し

てこの庭に入つて、大根畠へ短刀を隠して行つたことになりますね、ゲープ」

「——」
「どう考えても腑に落ちない事だらけでさアね。御新造、あの晩、この家の裏口に血が——ほんの少し血が付いていたのを御存じですか」

「えッ」
「曲者は大根畠に短刀を隠して、それから又この家へ引返したことになるのは変じゃありませんか」

「それとも、宵のうちに三好屋の隠居を殺して、ここへ引返したかな」

「――」

平次の舌は次第に冷静に事件の核心かくしんに触れて行きますが、身体は反対にすっかり酔払って、他愛もなくフラリフラリと揺れるのでした。

八

「今晚も泊って下さるでしょうね、親分」

「冗、冗談言っちゃいけません。御新造はもう丸山町のお屋敷に帰んなさる身体だ、——男を泊めたとあっちゃ、ブープ」

平次は立ち上がろうとしましたが、腰が抜けたようにへたへたと坐つて、口ほどになくフウフウ言っております。

「外ならぬ親分ですもの、誰が何と言うものですか、さア、私が寝んねさして上げましょう」

「——」

お紋は肩を貸して、ようやく平次を抱き起すと、女中——いっぞやの冷たく美しい女中に灯を持たせて、この前平次が泊った部屋に連れ込みました。羽織を脱がしえこう衣桁へかけて、平次の身体を

床の中へ横たえると、上から蒲団を掛けて、トントン二つ三つ軽く叩きます。

「ゆっくりお休みなさいまし、——灯は消して置きましたよ。ね。御用があつたら、お手を鳴らして下さい、私か女中が参りますから」

姉らしく囁くのに、平次は返事もせず、もういひき軒をかき始めました。

それから一刻ばかり。

何やら怪しい者、——一朵だの黒雲のようなものが、平次の寢室に忍び込みました。軒も何にも聞えませんが、手探りで床のそば

に這い寄ると、盲目めくら搜りに蒲団を剥いで、闇にもキラリと閃めく刃。

平次の胸と覚しきあたりを存分に刺したのです。

音も何にもありませんが、身をひるがえ翻した曲者は、サツと、闇の中の衣桁へ――。

が衣桁の中には先客があつたのです。飛込んで来る曲者を迎えるように、ガバと組み付くと、その儘ねじ倒して膝の下へ。

曲者は僅かな声をあげましたが、蛇のように身体をくねらせると、平次の腕を抜けてサツと廊下へ、

「己れツ」

何と言う早い足でしょう。雨戸を一枚蹴開いて、その儘臙銀のおぼろぎん夜の庭へ、怪鳥の如く飛降りるのを待ってましたとばかり、下から無手と飛び付いたものがあります。

「野郎ッ、逃すものか」

腕力だけは人の二倍もある、ガラッ八事、わが八五郎が、平次の旨を受けて、宵からそこに待っていたのです。

「八、逃すな」

「何の」

「俺は眷属を捕まえて来る」

平次は引返して奥へ、その辺にうろうろする女中、美しく冷た

いを見付けると、有無を言わず縄を打って、元の縁側へ引返しました。

「親分、こいつは人違いじゃありませんか」

「何？」

「ここの御新造——お紋さんですぜ」

「あッ、逃しちゃならねえ」

ガラッ八の手が緩むと曲者はサッと脱け出すのを、追いすがつて平次。

「卑怯だぞ民五郎、——俺は滅多に人を縛らねえが、手前のような悪党は勘弁して置けねえ」

ピシリと肩を打つと、お紋はその儘根芝ねしばの上に崩折れてしまいました。

×

×

翌る日――。

「親分、お紋が幻の民五郎だったんですかえ。俺にはどうも解らねえ、絵解きをしておくんなさい」

八五郎は日向ぼっこをしながらこんな事を言います。

「その通りさ、あの女は生れ付きの悪党だ。身軽で無慈悲で、人を殺すことを何とも思わないが、自分の子だけは可愛かったんだ」

「へエ――」

「あの子だつて荻野左仲様おぎのの子かどうか解つたものじゃねえ。高木銀次郎というのは解つた人で、お紋の素姓を怪しいと睨んで、義兄あにに勧めて遠ざけたんだ。お紋はそれを根に持つて高木銀次郎を縛らせ、自分が荻野家へ還かえる筋書を作つたのさ」

「親分を引張り出したのは」

「錢形の平次の鼻を明かしたい為さ。悪党は自惚うぬぼれると、ついそんな気を起して、罠わなに陥ちるものだよ」

平次もさすがに感慨深そうです。

「お紋は本当に河村鞆負ゆきえの娘でしょうか」

「それも解つたものじゃない。いづれお白洲しらすで白状するだろう。

あの短刀も細工の一つだろう」

「三好屋の隠居は可哀そうですね」

「知らなくていい事を知ったばかりに殺されたのさ。男は怪しい女の内証事を嗅ぎ出そうとしちやならねえよ。ハッハッハッ」

(編注)

作品中には、身体障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

幻の民五郎

初出―「オール讀物」昭和九年四月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第二卷
河出書房 昭和三十一年五
月三十一日初版

編集・発行 錢形俱樂部